

広島県立美術館

研究紀要

第16号

- 船田玉樹の詩集 永井 明生 1(48)
— 資料紹介・自作詩集『庭』他五編 —
- サルバドール・ダリ《ヴィーナスの夢》における、
塗り隠された縄跳びについての発見とその試論 山下 寿水 36(13)
- 広島県立美術館館蔵品データベースの構築について 福田 浩子 編 48(1)

2 0 1 3

口絵 3 自作詩集『庭』 昭和23年 32.5×23.5 cm

船田玉樹の詩集

— 資料紹介・自作詩集『庭』他五編 —

永井明生

平成二五（二〇一三年）一月二日（月）から二月二〇日（水）まで当館で開催された「生誕一〇〇年 船田玉樹展」は、広島県呉市出身の船田玉樹の初期から晩年までの多彩な作品を軸に、速水御舟、小林古径、山路商、鏗光、丸木位里といった師友の作品も交え、出品総数三三九点（図録掲載の二二六点に加え特別出品として一三点が加わった）という大規模な回顧展となった。本展覧会では、手紙や自筆原稿といった資料も参考出品された。本稿で紹介する昭和二三年から二五年にかけて制作された一連の自作詩集も、そういった資料の一例として展示されたものである。

船田玉樹が絵画制作と並行して詩を詠んでいたことは以前から知られており、そのうちの河童をテーマとした二冊の詩集については、『広島県立美術館研究紀要第4号』（平成十二年三月発行）所収の小論「船田玉樹と『水墨河童』について」資料紹介・自作詩集『その河風をやめてくれ』『瘦河童』—」において全文を掲載した。しかし、河童以外のテーマで詠まれた魅力的な詩の存在も明らかとなり、書籍としても販売されている本展覧会の公式図録（『船田玉樹画文集 独座の宴』求龍堂刊）の中でも、複数の玉樹による詩作を抜粋して紹介した。今回は、それらのうち、『庭』（昭和三年）、『芭蕉』（同）、『野の人』（同）、『瘤鯛』（同）、『くろたけ』（昭和十四年）、『チヨカ』（昭和十五年）の全文を掲載する。それらは、画家・船田玉樹の知られざる側面を今に伝える貴重な資料であり、今後の船

田玉樹研究においても重要な位置付けがなされるものであると考える。

これらの詩作が制作された昭和二三年当時、船田玉樹は院展への出品を再開した。この頃、おそらくは院展出品作を制作する数カ月前に、玉樹は胃腸を病んで自邸にてしばらく静養、その頃から詩作に傾倒している（「病中長短七十餘の詩が生れた」と玉樹は回想、とりわけ六月に詩を集めたにつくった）。それは、これまでの作画生活を心静かに振り返るかけがえのない時間となったのではないか。詩作と絵画制作との関係について玉樹が述べた当時の興味深い文章が残っている。「私の絵の中でいへないことが詩の中でいへることは愉快です。絵は私にとって幻想と観念の表示ですが私の詩は今のところ正直な日記でありたいとねがいます。詩らしい詩を書かうとするより詩のかたちをかりて自分をかきとめてみたいのです。詩の世界で私がつと大きくなりもつと立派なものがかかる様になつたら私の絵も一緒にもつと美しくもつとあた、かくもつと立派になつて来るでせう」²。全文は続く紙面で紹介するとして、ここに抜粋した言葉は、玉樹の絵画と詩の両面についての創作の姿勢を率直に述べた、珠玉の一文と言えるだろう。

註

（1）船田玉樹「庭」『庭』（自作詩集） 昭和三年六月

（2）船田玉樹「草薬店への手紙」『瘤鯛』（自作詩集） 昭和三年六月

【凡例】

- 一、本資料は、画家の遺族のもとに残る自作詩集である。
- 一、本資料は、六点全て袋綴じ冊子、各一冊。外寸はいずれも三二・五×二三・五cm。
- 一、鶯色の厚紙を表と裏の表紙とする。表側には和紙に書かれた外題が貼り付けてある。
- 一、明らかな誤字脱字以外は、原本を忠実に再現した。

『庭』 昭和二十三年

庭

やうやく画室出来たれども

画室の前の庭を作れず

荒れしまゝにてほつてありしが

石内のおちさん五日も通ひ来りて

ともかくまず生垣をと

生垣を作りてくれぬ

幾車も雑木を運び

ごていねいに考へ考へ

藤や山吹小松常盤木

われは多く名を知らねど

枯れば枯れた垣根になりますと

次々に植えゆきて

生垣の出来上りたり

有難きかな金出して

垣根を結ぶ餘なければ

道行く人に見らるゝを我慢して

一年あまりをすごしたりしに

六〇すぎし老人老人も金持ならず

いらぬ庭木を持つにあらねば

山へ雑木をさがしに登り

それを掘りおこし運びおろし

石内よりこゝ迄半里の道

ことごと車ひきて来たる

凝性なれば時を忘れ

日のくるゝ迄仕事して

生垣の出来上りたり

日たつほどに

枯れし木あれど

枯れたるは枯れしふぜいありて

われを日々楽しめます生垣

この生垣にかこまれたる

せまく細き庭のうちには

庭にすぎたる牡丹一もと

三十年にあまる老木の

株はりたるが植えてあり

こは

次郎坊さんのくだされしもの

次郎坊さんの畑にありしを

汗出して掘りあげ

手つだつてもらいわが庭に移せしなり

次郎坊さんはわが家の前なるが

植えなさるならあげますよと

あれもこれもくだされたり

水仙イチハツ菊の株

あやめ紫陽花矢車草

きんぎん草迄いたゞきて

庭せまければこれだけで

結構庭になりたりき

貧しき庭なれども

わが庭ならばうれしくて

見れどあかなく見るほどに

心すがしくなるぞよろしき

わが生垣もわが庭も

かくてめぐまる

ついでにこれも植えなさいと

次郎坊さんの持ち来たるは
 ダリアの球根なりしが
 われはこの花好まざりせば
 いや結構ですと申したりしに
 いつも物いたゞく時
 いや結構ですと辞退すれども
 結局もらうならいなりせば
 次郎坊さんはわが意を解せず
 球根を置いてかえりぬ
 われは好意を無にすべからずと
 球根を土にうづめぬ
 やがて球根の芽ふく頃となりて
 日に増し大きくなり行くを
 かなしい様なうれしい思ひして
 ながめいたりき
 遂に丈高く育ちぬ
 或る日花は小さかりしが
 花ひらくダリアわが庭の
 新しきながめとなりたり
 われはその頃胃を病みて
 十日あまりを寝たり起きたり
 病人めきてくらし居たれば
 よそには行かずわが庭を
 ながむるのみを樂しめり
 はじめいやいや植えたるダリア
 花咲く見ればうれしく
 つくづく見れば造物主
 作りたまへるものなれば

おろそかなるものあるべからず
 この花好きになりたり
 下品と言はば下品なる花なれど
 わが庭にあるを何ぞにくむべき
 次郎坊さんが生垣から
 首さし出して「今日は」と言ひたれば
 おかげでダリアが咲きましたと
 心から
 御礼を申したるなり
 病中長短七十餘の詩が生れたが「庭」は第一作であつた
 静かなる朝
 犬鳴かず鶏どりもうたわず
 のんびりかんと静かなるなか
 どの辺の家の人なるや
 とんとんとんと
 ものたゝき居り
 とんとんとんと
 やむことなければ
 われはめざめて
 おきようと
 おきるつもりでいたりしに
 またねむくなり
 うとうとする
 とんとんとんの音やみたり

二十三年六月

とんとんとんの音のなければ
 もはや何の音もせぬなり
 壁にむかいて
 ひとのなさけをくむなかれ
 ひとになさけを與うなど
 なげきのはてにひとりごつ
 ひとりあることのさみしけれども
 ひとりあることのうれしやと
 壁にむかいてものいへば
 壁は人にてあらざれば
 こたへず
 われは
 達磨のまねをして
 しばらく
 壁にむかいて
 るたりけり
 ひとをおもへば
 ひとをおもへばかなしきを
 ひとをにくめばくるしきを
 雨をき、つゝ、わがおれば
 心しづみてさみしきを
 耐え得ずなりてたゞひとり

二十三年六月

雨の中へといで行かば
雨はわが身をぬらすなり

春雨

桜にけむる春雨や
桜の土手を行くひとの
誰が子なるかはわからぬに
恋しきまでになつかしや

桜にけむる春雨や
桜の庭に迷い来し
老いたる犬のぬれそぼち
なきもせでやがてかへれり

桃鳩圖

画聖徽宗皇帝の作に
桃鳩図あるといふ
われはカラー図版で本ものを
うかがうのみ

桃の花が満開だ あ、ほんとにきれいだなあ
こんなよいお天氣にこんなきれいな花を見るとは
もつたいない 有難や
何処かで鳩がないとるな
これではまるで
極楽だ

極楽だ 極楽だ

ねむくなつてくるわい

あ、ねむい

極楽の桃の木に

鳩メがとまつとるわい

いつの間に来たのやら鳩メ

啼かないもんだから

気がつかなくつたぞ おかしいな

うごかない

うごかないよちつとも はて鳩も

酔つたかな 花に

それとも ねむつているのかな

それにしてもだ おかしいぞ

おかしいどれどれ

近くへ寄つて見ましようわい

わたしがこんなに近よつても

にげもしない 動かない 妙な鳩だよ

死んではいない 生きている 生きてござるよ

生き生きと ほんとに生き生き

その目はばつちり横むきだ

まつすぐ前向きうごかない

ふくらんだその胸がふんわりと

桃の小枝に花はちらほら

三つ四つ

あ、立派な鳩だわい

おつとりきれいな鳩だわい

ほんに絵の様な圖だわい

鳩と桃のうつりのよいこと
待てしばし
何処かでこいつは見たようだ

へんだなあ妙だ

思い出した ふん

思い出した

支那の何とか言つたな

あの絵のお上手 それもとびきり

お上手な皇帝さま

そうだ 徽宗皇帝

それにちがいない

あのお方が

と言つても逢つたことはないやねえ

なにしろ古いむかしの話でね

つくり話と思ふなよ

ほんとの事だ

本にのつてることだ

その本に

皇帝さまのかゝれた絵が

色ずりでのつてるよ

それがこの桃に鳩といふわけだ

わかつたね

桃の花と鳩の圖がら

いばる様だが徽宗筆桃鳩図

それとこの桃と鳩とが

よく似ているといふわけだ

いやそつくりだ全く

似てるどころのさわぎぢやない

まつたくそのまゝ、そつくりだ

不思議なこともあるもんだ

そつくりさんだそのまゝ、だ
そつくりそのまゝ、そつくりだ
桃の花は満開だ

お天気はよろしいと
啼かないけれど鳩もいる
しかも皇帝さまの御鳩だ
みんな黙つて見てなさい
なに

わしだけがしやべつていと
しやべりすぎるとねむいのう
あ、ねむかつた ねていたいわい
とろとろとねむつたわい まだねむい
おや

皇帝さまの御鳩は
はて

いづこへ
飛んで行かれたな

二十三年六月

かぼちや

去年かぼちや作りぬ

出来よくて八十あまりとれたり

かぼちやの中でかぼちやの絵を描く

二十枚も描きたり

かぼちや差上ぐるかはり

ひとにかぼちやの絵をおくる

また望まれて金にかへたり

出来悪さがどこかに残りおれども

お、かた人に渡したり

われは近頃下手なうた作れど

うたは絵のごと人に渡すことなし
おもうこと書きしるすのみなれば
ただおもうがま、にうたうのみ
金にかはる絵をなまけ

金にもならぬうた作り
貧乏神の訪ね来て
今日はとうなれど

われは王者の生れならば
た、おうように「通」れよと
答うのみ

二十三年六月

王者

めざむれど起き上らざる

わがなまけ者のしるしなり

ろくなめしをくはざるべしと

老父の、しるはうべなり

いかに金持つとも

われの如くにねむれるや

起きてある間は心せわしく

いらいらせずばあらぬものを

朝寝の床になまけ居る間は

王者の心を心とす

今朝は近所の鶏も鳴かず

鳴かぬは午ひるに近きしるしか

わが家の時計こわれしま、なれば

不便なれどもいそがしくなく

かくはゆつくり休まる、なり

二十三年六月

こんなのにんびりして、

こんなのにんびりして、てよいか

このま、では死にはしないか

梅雨が降つている

予定通り仕事はす、まず

もう家には金はなく

金の入るあてもない

その上いつもの腸は悪い

起きるがだるく床にいる

そのくせ心はのんびりと

外の雨をきいている

これで農家はよろこぶし

電力も助からう

困るのはうちのうさぎのたべものだが

もうしばらく我慢せよ

おれも死ぬのはいやだから

かうしてゆつくり

かまへているのだ

雨が降つてるその時は

雨をきくよりみちがない

二十三年六月

死なぬ工夫

齡三十七となりぬ はじめて
こしかたゆくすえにおもいをいたすや
切
われは永らく
まぼろしの中にたわけいたり
めざめておのれの掌を見る

われは体つよからねば
死をおもうこと度々なり
死ぬには早きものと思ひ
おもむろに死なぬ工夫をこらす
ちかごろおかしき詩作るは
何の酔狂なりやとひといふならんが
こは
死なぬ工夫の一つなり

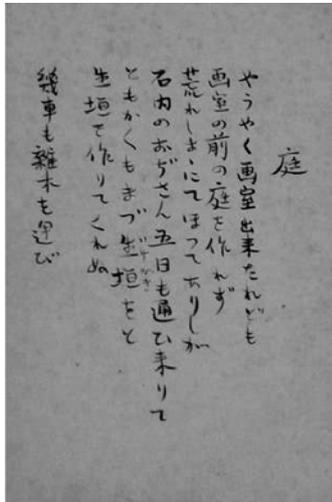
二十三年六月

死を待つ心にて

無藝無能
この一すぢにつながると
芭蕉翁のいへるなれども
清く正しき志操を守らんとすれば
たゞちに飢餓せまる
かなしきかな昔より
まことの道のけわしくてわれもまた

こゝに苦しむ苦しめど道はひらけず
今は死を待つ心にて
ひそかに詩などつくるなり

二十三年六月



『芭蕉』 昭和二十三年

芭蕉

わが庭にひともの樹木なけれど
さて植木を買う餘裕なく
山へ雑木を掘りに行く気にもなれず
味気なければよそ様の
背高き庭の緑をば
われは眺めて暮しつ、
いつかはわれもわが庭に
何か植えんと思ひ居りたり
去年夏のはじめ
広島なる左鬘子を訪ねし時
庭に植えたき草木を
夢語るごと語りしな
芭蕉を植えて見たしと言へば
芭蕉ならば線路のところにあるといふ
持ちかへるならば取りにゆかうと
左鬘子気早に立上る
そをとつたらばしかられぬか
捨て、あるもの也心配無用
去年の夏から捨て、あり
恐らく今も捨ふ人なく
そのまゝ、ならん
思いもかけず道ばたに
芽のふきいで尺ばかり
なるが二株
芭蕉を見るよろこびて

顔あかめたり

かの芭蕉翁に芭蕉を移す詞あり

長文なれど名文ぞ

左に寫す故がまんして

しばしまれよ

一とせみちのくの行脚思い立て……

終に三とせの春秋を過して

ふた、び芭蕉に涙をそ、ぐ

今年(元禄五年)五月の半

花たちばなのほひもさすがに

遠からざれば

人々の契りも昔にかはらず

猶此のあたり得たちさらで

舊き庵も梢近う

三間の茅屋つぎくしう

杉の柱いと清げに削りなし

竹の枝折戸安らかに

葭垣厚くしわたして南に向ひ

池にのぞみて水樓となす

池は富士に対して柴門景をす、めて

な、めなり

浙江の潮三ツ又の淀にた、へて

月を見る便のよろしければ

初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ

名月のよそほひにとて先づ芭蕉を移す

その葉広うして琴をおほふに足れり

或は半吹折れて鳳鳥の尾をいたましめ

青扇破れて風を悲しむ

とあつて次の句を作れりといふ

芭蕉葉を柱にかけん庵の月

芭蕉庵の芭蕉を想い

絵師われは

芭蕉庵の芭蕉描きしことあり

それよりわれは庭持たば

芭蕉を植えんと思ひなし

思ひありしが運よくて

古家手に入りアトリエに

作り直して住むことに

なりし上にもせまけれど

庭となすべき

土地ありて

いつか芭蕉を

植えたとし

思ひ思いて

いたるなり

われの想いの芭蕉也

持ちてかへりて早速に庭に植へたり

芭蕉の株の小さけれ

道行く村の人達の

なんでがんすか

あの南の島に生い繁る

芭蕉です

われの芭蕉は夏のうち

三枚ばかり葉をのぼし

のぼしたれども大ならず

二株のうち一株は

くさりたり

その葉広うして

琴をおほうに足れりとは

芭蕉庵の芭蕉なり

われの芭蕉は琴ならば

大正頃にはやりたる

大正琴をおほうべし

よその娘の

十二三なる女の子

弾きいたる小さきを

借りて弾きたり

われは今猶ハモニカも

吹けぬがほどに楽器をば

いぢるが下手の者なれば

幼きわれの

ピンピンピンピンピンと

弾きしなるべし

去年の夏は芭蕉ひともと

小なりといへわが庭の

王者なりしが

今年春に生垣の

出来て木のふえ庭のうち

牡丹をはじめあれやこれ

さ、やかなれどにぎやかに

庭のかたちの出来たれば

去年ほこりし芭蕉葉の

少し芽を出し芽ののびて

尺にあまりて今あるが

かなしやとなりて大いなる

ダリアのあれば見えなくて

哀れ

なかなか太らず

残りたるこの一株
心細し

われもし大正琴を手に入る、あらば
幼きわれのなせしごと

ピンピンピン

ピンピンピンと

わがいともしき芭蕉葉に
きかすべし

二十三年六月

酒

唯たまゆらの命かなしみ

酒におぼれしは昔

今はひねもすひりし居の心して

しすまりてすこす

むかしの人のむなしく

われのみ

むかしに変わる姿こゝろして

思いかげざる土地に住む

日頃は酒ほしと思はねど

酒飲みし事忘れ居れども

独酌にて

二合ばかり

飲み

それからゆるり

ねむらんと思ふ夜もあり

まぼろし

古き都の片ほとり

古き御堂にさす陽かげ

かたむきうすれ行く如く

うすれゆるくなるまぼろしの

消ゆることなき狂ほしさ

パンのかおり

家のまむかいに

パン焼く店が出来ました

病後のだるい体を

庭に面した縁側に運び

きつい日の光がまぶしく

目を細めていますとね

パン焼く時刻なのでありませう

パンのかおりが

風に乗つてきましたよ

やわらかです

ふんわりあつたかです

甘くてちよつと

すつぱいあのかおり

おいしそうだなあ

パン

ぜいたくです

そこら中ゆたかにたゞよつて来ましたよ

ねむくなりそうなお晝間の
山の麓の部落です

静かなところ

パンのかおりだけが

陽の光にとけながら

おしげもなく

どんどんひろがつて行くのが

耳にはきこえないのでありますが

音になつて

きこえるみたい

パンのかおりはまづ

隣近所を見舞います

隣といへば次郎坊さん

次郎坊さんはお晝間は

皆さん畑です

牛と小さい軍鶏と

白といふ小犬と

ふつうの鶏と

年とつた猫と

これだけ

パンのごちそう

いや

パンのかおりのごちそうに

あづかることありませう

パンのかおりは空高く

あがる途中を立寄つて

今をさかりの杏の実

実つた間をていねいに

あいさつしては行くでせう

大分時間が経ちました

パンのかおりは大川の
土手の辺迄行つたでせう

あの大川の川風に

パンのかおりが乗つたなら

見る見るうちに海へ行き

それから消えてしまふでせう

パンのかおり

そのたちまち消えてしまふ

パンのもつたいたないかおり

山里のきれいな空気の中で

ふんだんに吸へるのですよ

配給のパンとちがつて

かおりが全くちがいます

天国から来たようなのが

むんむんどんどんどん

わたしは病後で弱つてるので

ひとたまりもなく

パンのかおりに

酔つてしまい

おなかも一杯になり

あゝかなわぬわいかなわないと

よろけながら

パンのかおりのうすい方へ

逃げて行つた次第です

二十三年六月

極楽

あぶぢや あぶぢや

あぶぢや

まだもの言へぬ おさな児の

機嫌よくて ひとり遊べる

そをばき、つ、うとうとと

床をはなれず寝てあれば

人の世のこと思はれず

金のなきことも思はれず

死ぬことなども思はれず

われ極楽の蓮の葉の

上にねむりてあるごとく

思はれければそのまゝに

またも

ねむりに落ちにけり

二十三年六月

わがうた

病みて文書くこと覚え

ひそかなるひとりごと

しるす

われに

詩魂ありと思はねば

ひとりごとに遊ぶ

詩神われに宿るならば

わがなまこ光り

心いや澄み

おごそかに

美しきうた生むならん

われはさような者にあらず

親しき者に見せんを楽しみに

かくうたうなり

二十三年六月

雨

雨が降らんかなあ雨が来んか

今日もやつぱり降らないね

當分駄目雨雨雨が降つて下さらんと

みんな死んでしまいます

降つて下さい降らせて下さいお天とう様

どつと降らなくても

少しでも我まします

いえ少しでもよいのです

芋も駄目稲も植えることが出来ません

野菜も息が切れそう

人も動物木も草もみんなみんな

あなた様をこがれています

生きてはいられません

それでは一寸

お伺いいたします

死んでしまへ

死んだほうがよいと

申されるのでありますか

そんなことを仰有らないで
お願いです

降つて下さい

ほんにしようがないねえ

雨が降らなくて

雨が降らなくちやあ

どうにもなりあしない

雨だ雨だ雨よ降れ

雨の奴メ降つてくれよ

これは失礼

雨の神様

お降り下さい

雨ですか

雨ならいつか降りますよ

呑気なこと言はないで

あんた井戸の水もかれてしまつて

お米もとげない有様よ

それにしては

みんなよく生きてるなあ

どつちにしたところ

たいしたことのない自分だ

このまゝ降つてくてなきあ

地球のものがあつさり

片づいてよいですよ

雨なんか降らんがよい

僕はちつとも困らない

あゝ雨よ

降るな

降り給うな

降りたくても我まんして

みんなへたばる迄降らないで下さいよ
みんなが死んでしまつたら

その時こそ思い切り

千万年でもつづけさま

地球がとけてしまつて

降つて降つて

降りつゞけて下さいよ

かまうことありません

このまゝ降らんどういて下さい

たのみます

芭蕉園

廣き平庭に

芭蕉程よく植えたり

幾株の芭蕉なりや

その葉重なり

その葉つらなりて

芭蕉葉の海となる

芭蕉園の主は何者ぞ

見るに芭蕉の根元

小竹二三本立て、あり

夕顔のからみたり

他の一株におなじく添へたるは朝顔

心にくきこの園の主かな

きりぎりす

体がわるいとはいへ

ぜいたくな晝のねむりからさむれば

よその時計の四時打つが聞ゆ

外はあかるく

かわきたる暑き陽なり

われは井戸端に出て

顔洗はんと水くみていたり

ものみなけだるく見ゆるなか

緑の木の葉小さが一枚

散りきたるよと見てあれば

きりぎりす舞い降りしなり

あまりにみどり美しければ

捕へてみると

ねむき手をのばせり

不用意なり

ねむき手の人差指

咀まれたり

覚悟せざる災難

恥かしけれどまことに痛し

あわて、手を引く

見るに虫メ

懸命にかみつき居り

思はず痛い口走る

口走れどゆるしてくれず

いたみこらへて虫を觀察するに

きりぎりす

小なれど頑健

すきとほるかと思ゆ

二十三年六月

精巧をきわめて立派なり
緑の寶石

面魂はいかに

闘志まんまんたり

虫闘志まんまんたれど

大なる男すでに参る

われは痛みのはげしければ

眠気すでに消え

何とかせねばならんと

痛きを我慢

我慢して掌を大きくふりたれば

虫おどろきてはなれたり

やれやれ助かれりと指を見るに

咀まれたるところ紫を呈す

虫はいづこにと見たすに

すでになし

間抜けたる男一人

この地上にある心地して

夏のひるすぎの

わびしかりけり

二十三年六月

あとがき

二十三年六月はじめて詩を書いた記念
すべき月であった。詩を書いたことは本業の
絵のかけなかつたことでうれしいことではな
かつた

残っている詩稿を今なりの考へで手を入れな
がら書き改めることが実現したのは何とし
てもうれしい。朝起きてすぐとか仕事の途中
の時間にする仕事で書きあやまりの出来た
ことは致し方ないが永い間忘れてしまつてい
たり思い出しても手のつかなくなつたことである
今、元氣であることが有難い



『野の人』 昭和二十三年

野の人

野人
野を征くが如きくらしぎまを
ひとにほこりしはむかしなり
老いたるにあらぬに
こゝろざしむかしにちがひ

いまはひねもす机によりて
詩をつくり

ひとを厭ふ

貧なるに

あはてずあれば

ますく貧

されど家のほとり

少しばかりの土地ありて

だいたいいちぢく

かきあんず

時くれば実る

また

ぢやがいも植えたれば十貫とれたり

かほちや去年は

八十個を得

今年はトマトよろし

野人野を征くがときは

むかしにて

いまは

野にかくれしに

似たるかな

極楽

あぶぢや あぶぢや あぶぢや
まだものいへぬ幼児の
機嫌よくてひとり遊べる
そをばき、つ、うとうとと
床をはなれずねてあれば

人の世のことおもはれず
 金なきこともおもはれず
 死ぬことなどもおもはれず
 われ極楽の蓮の葉の上
 上にねむりてあるごとく
 思はれければそのまゝに
 までも
 ねむりに落ちにけり

二十三年六月

わがうた

病みて文かくことを覚え
 ひそかなる
 ひとりごとをしるす
 われに詩魂のありと思はねば
 われはのんびりとあぐらして
 ひとりごとしるすを楽しむ
 詩神
 わが身にやどるならば
 わがなまこ光り
 わが心いや澄みて
 おごそかに
 美しき詩を生むならんを
 われはさような者にあらねば
 親しき者に見せんを楽しみに
 かくはうたうなり

二十三年六月

雨

雨が降らんかなあ
 雨が来んかなあ
 今日もやつぱり降らないね
 この分ぢや當分
 駄目ですわい
 あゝ雨 雨
 雨が降つて下さらんと
 みんな死んでしまいます
 降つて下さい
 降らせて下さいおてんとうさま
 雨 雨 雨
 どつと降らなくても
 少しでもがまんします
 いえ少しでもよいのです
 芋も駄目
 稲も植えることが出来ません
 申す迄ありません
 野菜もいきが切れそうです
 こんなことを申したところで
 泣きごとでしかありませんが
 人も木も草も此の世のすべての
 いきものが皆
 あなた様をこがれています
 あなた様が降つて下さいませんか
 皆生きては居られませんか
 それでは
 みんな死んでしまへと
 仰有るのでありませうか

そんなことを仰有らないで
 お願いです
 降つて下さい
 ほんにしようがないねえ
 雨が降らなくて
 雨が降らなくちやあ
 どうにもなりはしない
 あゝ雨だ雨だ雨よ降れ
 雨の奴め降つてくれよ
 これは失礼
 雨の神様
 お降り下さい
 雨ですか
 雨ならいつか降りますよ
 のんきなことを言はないで
 下さいよあんた
 もう井戸の水もかれてしまつて
 お米もとげない有様よ
 それにしてはよく生きてるなあ
 どつちにしたところ
 たいしたことのない世ですから
 このまゝ降つてくてなきあ
 地球のものがあつさり
 死んでしまつていやはや
 片づいてよいですよ
 雨なんか降らんがよいです
 降らなくても僕は
 ちつとも困らない
 あゝ雨よ降るな
 降るな雨よ降り給うな

降りたくても我まんして
みんなへたばる迄降らないで
下さいよ

みんなが死んでしまつたら

そのきたない人間共を

まづ洗ひ流して下さいよ

その時こそ思ひ切り

千万年でもつづけざまに

地球がとけてしまつて

降つて降つて降りつゞけて下さいよ

かまふことはありません

このまゝ

降らんどいて下さいたのみます

芭蕉園

廣き平庭に

芭蕉程よく植えたり

幾株の芭蕉なりや

その葉重なり

その葉つらなりて

芭蕉葉の海となる

芭蕉園の主は何者ぞ

見るに芭蕉の根元

小竹二三本立て、あり

夕顔のからみたり

他の一株におなじくそへたるは

朝顔の

心にくきこの園の主かな

二十三年六月

きりぎりすと男

体がわるいとはいへ

ぜいたくな晝のねむりからさむれば

よその時計の四時打つが聞ゆ

四時と言へども六月の

夏時間といふにてあれば

まだ外はあかるく

かわきたる暑き陽なり

われは井戸端に出て

洗顔せんと水くみ居たり

ものみなけだるく見ゆるなか

緑の木の葉小さが一枚

散りきたるよと見てあれば

きりぎりすの舞ひ降りしなり

あまりにみどり美しければ

とらへてみるとねむき手をのぼせり

不用意に虫とらへんとしたれば

人差指

われは虫にかまれたり

思ひの外にいたく

あはて、手をひき

見るに、きりぎりす

懸命にわが指にかみつ居り

虫といへどもばかにならず

思はずいたしと口ばしりぬ

口ばしれどゆるしては呉れず

われはいたしかたなく

いたみをこらへ

虫をながめぬ

きりぎりすの

小なりといへども頑健なる

すきとほるかで見ゆるそのからだ

くみたての精巧をきはめて立派なり

緑の宝石みて

神や作るとおもはしむ

まことにうるはし

わが指にかみつける面魂を見るに

なかなか闘志ありてよろし

虫は闘志まんまんたれど

大なる男すでに参れり

われはいたみのいたければ

ねむ気すでに消え

今は何とかせねばならんと

少しいたきをごまんして

掌を大きくふりたれば

虫おどろきてはなれたり

やれやれ助かれりと思はず

指を見るに

かまれたるところ紫を呈す

虫はいづこにと行きたるかとおもむろに見わたすに

虫すでになし

間ぬけたるおのれ一人

この地上にある心地して
夏のひるすぎの
まことにわびしかりけり

二十三年六月

櫻の土手

櫻の土手に雨しげく
男の子等の三四人
傘なくて走れり
そののちは
桜の土手を行く人なく
雨やまず
夕となりて
その土手も
雨も
わが窓も
夕の色と
かはりたり

夏の夜

ものかきおれば夏の夜を
かなぶんぶんのとんで来て
ぶんぶんぶんととびまわり
ついに硯に落ちにけり

硯の墨の池の中
かなぶんぶんの羽根とめて
休むなる

かなぶんぶんのしずかなるは
なんとなう
落つかぬぞや

天をめざして

つゆ豆を植えた 竹をたてた
つゆ豆はのびて 竹に登る
登りきるのに 何日かか、つた
登りきつてしまひ もう
登るところがない
それでも蔓はのびて来るので
どこかへからんで登らねばならぬ
雨がながく降らぬといふに
蔓はどんだんのびてゆく
花をつけた 実ものつた
それでは蔓はまだのびる
からむ竹がないからといつて
のびるのをやめはしない
蔓は互にからみ合ひ
天をめざしてのぼつてゆく
蔓は二本三本からんでも
自分達の重みに耐えかねて
途中からまがつてしまふ
逆もどりだ
しばらくぶらく／＼しているが

また登らうぜとはげまし合ひ
蔓はすくらむ組んで出発する
座折してかへつて来るが
またはじめる

天をめざして何度でも
のぼるのだ
あきれた豆の蔓達よ

牛男

このあたり農家多し
どの家にも牛あり
されば蠅多く
六月ともなればどつとふえ来たり
牛小屋の蠅わが家を襲ふ
われは蠅軍にへきへきし
命ちまん思ひして
蠅見れば心怒り、苦しくついに悲しく
田舎住ひを憂しと思へり
去年はじめて蠅の大軍に出会ひし時
われは参りて蚊帳つりて之に備へき
しかるに今年
われの神経妙になりたるや
蠅見れど驚かず
蠅のきたなきを忘れしにあらねど
蠅の為心くるしまず
ひとの来である時は礼儀なれば
蠅追ふこともするなれど
ひとり晝寝になまけ居るとき



うるさく蠅のわれに集まるを
われはねむき手もて時々はらいのけつ、
蚊帳なくてねむりに落つ
君よ
牛小屋の牛を見たるや
また牛小屋の蠅を知れるや
われはのらくらくらしあるうち
牛のごとくになりたるか
牛のごとくになりたれど
蠅追ふ牛のしつぽ持たねば
われは細き手もて
おもむろに蠅を追ふなり

二十三年六月

『瘤鯛』 昭和二十三年

瘤鯛

「四十にもなりて
ろくなめしをくはざる奴」
こは口悪き老父の
われをの、しる言葉なり
性さがのかなしき息子なれば
われはまさしくろくなめしをくはず
まさしくしかりとつねにおもひ
おもへども
うまきめしくはんと
ふんばつするにあらざれば
ゆくさきも
ろくなめしをくはざるべし
ろくなめしくはざる息子
胃を病みしあげくなれば
やせ細りて籠り居りし
老父老母をともないて見舞い給ふ
たつさえ来たる魚二匹にて一貫五百
鯛と瘤鯛なり
瘤鯛、そのかたち鯛に似たれども
色、鯛より安手にて
すべて鯛より見劣りぬ
鯛に似るとも似る為に
鯛の下僕の如く見ゆ
猶この瘤鯛、名の如く
頭部に隆起ありて瘤をなす

老父申さる

この魚かくぶざまなれども
かくの如く肥えふとり
あぶらのりたる魚なれば
こちらの鯛より美味ならんと
見るに瘤鯛
馬鹿ぶとりといふ言葉の如く
ふとれり
われは四十に近く
ろくなめしくはぬ者なれば
からだ細り
鶴の如しと言はゞよろしけれど
今はたとへんもの思ひあたらず
若き日より夢多く
思ふことのみ多くあれども
何事もなさず月日重ねたれば
わがおもひ
瘤鯛の瘤の如くかたまれり
われもし魚にてあるならば
やせたる瘤鯛ならん
かくおもへば瘤鯛の
いとしく親しかりけり
瘤鯛の煮られたるをたぶるに
まさしく鯛よりあぶらありて美味なり
久々にたべし魚の
あまりに多きあぶらなれば
弱きわが胃腸
負擔に耐へずして今朝はらくだせり

われは身だるく起きることをせず
近頃おぼえしうた作りのくせ出でければ
床の中にてこのうたつくれり

二十三年六月

独居

獅子は独居を好むといふ
古人のことばをおしへられ
なるほどと感心する
となりの犬はつながられて
ひねもす独居のかたちだが
犬の気持はどんなものかな
さておのれのことになるが
わが独居の心はいかにと
おもつてみるに
獅子にあらず犬にあらず
なにものに似たるやと考へるに
そうであれだ
のつそりと寝てばかりいるところは
牛小屋の牛
それにしてもおかし細すぎるわが身の事だ
鶴の様な牛といふのは
まだ聞かぬがな

二十三年六月

わしは犬のことばを知らぬ

梅雨が降っている

犬が

かなしそうにないている

いつもとちがふ

ひく、たかく

なか／＼複雑にないている

何をうつたへていいるのか

言いたいことがあるのだから

その家の主人達は

この雨では家にいないだらう

芋植えに行つたか

田植の仕度でもしてらだらう

犬のなくのを聞いていいるのは

このわしだけにちがいなからうに

わしは犬のことばを知らぬので

かなしそうだわいと思ふだけ

犬の心はわからぬ

あきらめたか犬はなくのをやめた

わしの世界は

雨の音ばかりになつたよ

二十三年六月

目のなき魚

海そこに

目のなき魚の住むといふ

目のなき魚のかやしやと

ひとのうたへるうたよみて

われもかなしと思ひたりしよ

わがこのごろのうたごゝろ

おのれひとりのひとりごと

目のなき魚の岩かげに

籠りて泣くに似てあれば

かのうたびとのうたひたる

うたにならひとわれもまた

目のなき魚のかなしやと

声あげて うたふなり

二十三年六月

雨の會話、妙だな

素人詩論、之も変だ

詩でなくても、詩といふ

ことにする

とうとう降つて来ましたね

ほんとに雨になりました

有難い雨です

結構なおしめり

あ、これでやつと生きかへりましたわい

あした迄降るのでせうか
さあどうですか

明日はお天気かも知れませんよ

天気豫報はどうでした

あてにならないですからね

心配いりません

いよいよ本降りときましたよ

これで芋もうえられる

田植も出来る

何と言つても六月に

雨のないのはかないませんな

ほんとに永い天気つゞきで

めぐみの雨とはこのことです

一雨千両といふところですか

それは昔の話ですから

今ではどのくらいになりますか

おしやべりしていると歸れなくなりますから

どれ雨にぬれてかへりませう

雨も久々でお目にかゝると

ぬれて見たくなりますね

傘がないのでお貸し出来なくて

すみません

傘がないのかねみつともない

わかっているではありませんか

明日はさつそく困るのですよ

なぜ買つておかないのだ

買へれば買つておきますよ

どれどれもうねるとしよう

もしもしおきて下さいよ

雨がもります

ほんとに困るなあかう降つては
こんなに雨もりがしたのでは

家の中にも居られない

もう止んでもよさそうね

休み休み降つてくれないうんか

そんな注文だめですよ

あちこち水害の様です

この前の様になつちやあかなわな

電気はまだかい

今夜は駄目でせうよ

まつくら闇で雨をきくのは

気持の悪い風流だ

何だか今夜は

土手が切れてしまふ豫感がするが

私もさつきから

それをおもつて居りました

たんすの着物を

ぬらさぬがよいよ

着物はたんすにごさいません

それは呑気でよろしいな

これは一体何ですか

何ですかとは何ですか

小説か詩かといふ様なことです

それをきめねばいけないですか

雨が降らないもんだから

雨がどんどん降らんかなあと

思つていたら

こんなものが出来たのです

計畫も何もないのです

僕はこのごろ
人の会話をうつとりと聞くくせが
つきましてね

そのうつとりとした気持を

書いてみたかつたわけですよ

僕にとつては詩といふことにな

りませう

やはり詩です

むつかしくて

誰にもわからぬ詩を書けもいた

しません

書かうとも思いません

立派になればなるほど

愚衆の理解を越えたものもありますが

愚衆の心へも

ひゞいてくる立派なものもあります

藝術は高いところにもあります

身近にもある筈です

平易なものを作ることは

こちらの頭を見られている様で

なるべくむつかしげなものを

作つてみたいものですが

僕はやつと

自分のつまらなさを

正直にのべられそうになりました

ゲーテの立派さは立派ですが

親鸞のおろかさには頭をさげるのは

僕がつまらぬ人間だからであります

きたないもの悪者の仲間である僕が

どんな立派さをよそつて見ても

たゞ恥づかしいと思ふ様になつてから
詩が作れる様になりました

詩でなくても詩といふことにする

詩人と言はれている人達から

けいべつされる様なものでよい

自分で信ずることは

僕が詩人を気どらない限り

或は僕のまづしい文字が

詩の生命をたゝへてはいまいか

とんだ素人詩論でねむかつたでせう

もうおかへりになりますか

僕のところには時計がなくて

まだ月も出ていませんね

もつとも今夜あたり

月はおそい筈ですが

雨がざつと来るといゝです

何だか今夜はむしますから

明日は降るかも知れません

くらいです

おやすみなさい

髭

髭を楽しむくせつきぬ

三十路をすぎし無性者

無性の故にのびし髭なるを

或時知人われを見て

「髭おたてなごりましたぞ」

と言ひたれば

われは思はずかしこまり
顔赤らめて

「いやこれは違います」と答へたりしが

つくづく鏡を見てみるに

わが髭の

も早無性髭とは言いがたく

あまりにのびてありければ

はじめてわれはわが髭を

意識すること、

相成りぬ

髭てふものはえらきひと

えらきしるしにたくはへる

ものと思へば面はゆく

恥かしけれどえらくなき

山のきこりのおぢさんも

髭をのばしてあるなれば

われはおのれに申したり

「考へすぎる事はいらぬぞ」

髭てうものはほつとけば

のびるものにてあるほどに

落して見れど日の経てば

もとの如くにのびて来て

のびて仕末の悪きもの

われの如くに顔洗ふ

こともものうく時々

顔も洗はで朝飯を

喰ふが程なる無性者

何ぞ無理して

かみそりを顔にあてんや

かくてはわれは髭の持主

無性の髭をそのまゝに
のびるがまゝにまかせども

われは毛深くあらざれば

わが髭は鼻下とあごのあたりに少々

遠慮して位置をとりしのみ

日経ぬるとも

他の面積をおかすことなし

髭の主に似て汝

心弱きかな

山のきこりのおぢさんの

髭のごとくにもつさり

あれと願へどもばらなる

赤き髭かな

貧弱なれば恐らくは

わが髭をあなどりて

落せし方がよかるべしと

知る人ならば思ふなるべし

現に田舎の母人は

わが家の者に申されしといふ

「なんであんなものつけとるんぢやろか」と

われは髭たてゝえらきひとの眞似するに

あらず

えらきひとの髭はさすがにえらげなるを

わが髭は寒々と貧相なれば

髭あれどわれはえらげならず

むしろ髭あるその為に

「近頃御病気ですか」と言はることあり

また借金に行くとせば

金貸す方がわが髭を

見つゝものをばおもふべし
また交番の前通る時

あやしき奴と思はれん

下手な易者と間ちがへる人もあるべし

髭さつぱりとそり落したるその時は

面はゆけれど少しばかり若やきて

その味はひの悪からぬを知るなれど

今ははや

その味はひに引かることなく

ひたすら

おのれの髭をいつくしむ

わが髭はわが顔のさみしき景物なり

貧しき髭なれどわれはこれを受づ

たばこ喫まぬわれは髭なで、遊ぶ

何事もさして面白からぬ世を

死ぬよりは生きてあるがよろしからんと

生きづらき世を

生きてある日を

その日々を慰むるもの、なければ

髭なで、暮すてふ

こはひそかなるわがよろこびなれば

ひとよ

わが髭をとがめ給ふな

悠然として南山に対すとは

むかし支那の詩人のうたひしことば

われはほんやり裏山にむかふ

雑木ばかりのやはらかき山なれば

目を休むるに有難き山なり

冬の景色よろしく

夏の景色よし

春秋よろしき裏山なれば

暇あればかならず裏山にむかふ

われは煙草のまぬ手をあごにあて

多からぬあご髭つまぐりつ

ものみな忘れんとして

心を放つ

時として小鳥の群れるあり

からすの来たりて松が枝に止り

啼くかと思ふに啼かずして飛び立つあり

外国の飛行機にぶき音して山を越すあり

雨雲の急に降り立つあり

小雪ちらつくことあり

われは黙然としてあれば

さみしげに見ゆるなれども

われに髭あればさみしからぬを

さればひとよ

わが髭をわらひ給ふな

二十三年六月

草楽居への手紙

ごぶさたしました

お見舞に来て貰つた頃からすると

すつかり元気をとりもどした様ですが

まだ無理はき、ません

それでありますから

外へ出ることもあまりせず

仕事もどんどんやれないでいると

一日のうち大分時間のゆとりがありますので

ちかごろ熱心に詩作をしています

詩作はおもつたことを書きとめておくだけで

体力のいらぬのは有難いですが

詩三十篇ほど出来ました

いづれお目にかける日がありませう

私の絵の中でいへないことが

詩の中でいへることは愉快です

絵は私にとつて幻想と観念の表示ですが

私の詩は今のところ

正直な日記でありたいとねがいます

詩らしい詩を書かうとするより

詩のかたちをかりて自分をかきとめてみたいの

です

詩の世界で私がつと大きくなり

もつと立派なものがかかる様になつたら

私の絵も一緒に

もつと美しくもつとあた、かく

もつと立派になつて来るでせう

そう思つて詩を作り又

絵を描いていますから

詩作の為に絵をなまけていないことを

くんで下さい

詩情をやしなうといふことが

どんなに大切なことを思つて下さい

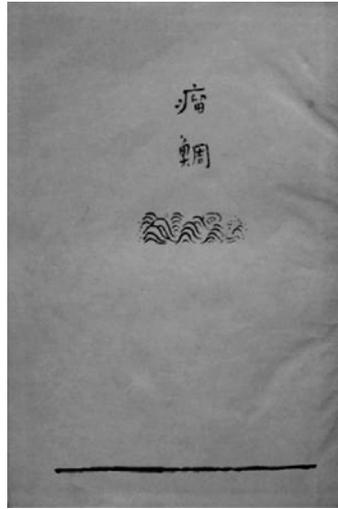
かきかけの春の絵が

九分通り出来ました

夏といふのに絵の中では

藤と櫻と牡丹と椿が咲いています
私のものにしては
やさしいものになりました
私のもつと丈夫になり
君によるこんで貰へるものを
うんと生まなくてはなりません
ではさようなら

二十三年六月



『くろたけ』 昭和二十四年

詩集くろたけ

目次

百合

山家

山百合

ピアノ

ひぐらし

紅葉

今宵祭の

秋のおはり

冬

くろたけ

百合

山中君の山家のほとりに
百合咲けり

その百合を

手折らんで

おくれ、ね

せつかく

女神が男神の為に

咲くのを待つていらした

食卓用の

百合なんだよ

君達

二十四年八月

山家

山の

一けん家だ

手製の

小屋だ

住んでいるのは

二人だけ

二四、八

山百合

君らの住居の山小屋

山小屋

五尺にあまる山百合

山百合

むせるかをりは

百合の吐く息

その小窓を
あけようよ

二四、八

ひぐらし啼けば
ひぐらしの
啼くにさそわれ
このわしも
こんな旅寝が
いやになる

ピアノ

二四、八

山の泉の横穴の
音楽をきませう

以上は横浜、山中君の山家での作

そら

ピアノの音が
ぬれてるね

紅葉

二十四年十一月十一日

二四、八

朱をたつぷりと
ときました

金と臓脂を
まぜました

ひぐらし

山の紅葉を描きませう

仕上げは藍をうすくして
もえる

紅葉を
おさへます

二四、一一、一一

今宵祭の

今宵祭の稽古の太鼓
定めし下手な打ち手であ
ろうよ

ドロドロドロときこえるワ
ほんまに涼しくなつたもん
秋になつたしようこには
何となう

さみしくなるではないです
か

ドロドロドロの祭の太鼓
虫がリンリンなきまする

秋のおはり

うさぎがびよんと
とんだので

紅の葉つばは落ちました
濃紫のまるい実は

小鳥がたべて
ゆきました

二四、一一、一一

ひぐらし啼くなよ
ひぐらしよ

ひぐらし

ひぐらし

ひぐらし啼くよ

ひぐらし啼くなよ

ひぐらしよ

冬

山の
畑のわきの
一本杉の
さむざむの
冬が来たでな
ほんまに
よ

くろたけ

くろたけと
茄子を煮ます
酢みそであへて
たべます
酒はなくとも
酒なしに
なれし身なれば
くろたけの
くろきおかすを
よろこびて
うまし
うましと
くひまする

『チヨカ』

チヨカ

詩集 チヨカ

昭和二十五年四月 鹿兒島なる
姉のもとに滞在、二十日あまりを
過す。

目次

姉

鹿兒島便り

旅

かまんつおどり

チヨカ

春雨に

鹿兒島なまり

木市

姉

幾山河

遠くへだてり

かの た、かい ありたれば

互に 音信 おこたれり

今日の日

めぐり来りて

相みれば

相みざる

十七年の

くるしみも かなしみも

消えはて、喜びと変る

あ、

まぶたなる母人に

まみえる如き

ひとなるかな

一三五、四、二三

鹿兒島便り

城山の

ふとか木を見せたいです

散歩道がついてます

インをつれて歩ませう

インは犬のことでありまして

あやしいものではありません

僕がインをつれて歩いて

西郷さんに似てないので

誰もあいさついたしません

その為僕はのんびりと

いそぐと何しろ

山路ですから

つかれてしまうも人ですから

一三四、一〇

ゆつたり山を歩きます

インは僕のインでありませんで

さつさと先に行つてしま

勝手に何處かへ行きました

迷子になるのはインでなくて

この旅人でありませう

独りで歩くにもつたない

楠の森の

散歩道

おもはずも
日をば過せり

二五、四、二四

雨あがり

唄はでおどる

鎌の舞

シヤンシヤン

ホーヤレ

ひと休み

はよきやんちー早よ来なさい

おどいぢやつどーおどりで

かまんつおどりは鎌おどりの意

二五、四、一三三

旅

愛憎遍歴の果なり

休息の時と處を求めやまざりしが

南の国のはてに來りて

その願望を達す

遠くへだつといふことの

何ぞ幸なる

人の世のくるしみも旅人と

なれば

しばらくは

忘れ得るといふことぞ

道往けどわれを呼ぶ者なし

なまり多きこの地の言葉を

異国の言葉のおもいして聞き流しつ

かまんつおどり

はよ

きやんち

おどいぢやつど

かまんつおどりを

やつてます

シヤンシヤン

ホーヤレ

おどりで

かまんつおどりの

若衆の

紅のたすきよ

すげ笠は

獅子のふり毛の

かざりつけ

鎌のほ先は

銀の色

着ている緋は

さつまもの

シヤンシヤン

ホーヤレ

おどりで

南の国の

チヨカ

チヨカでくみかう焼酎や

旅の身なれば

旅心

酔ひのはてなる

ものおもひ

チヨカは焼酎をあたゝめる土びん。直火か？

二五、四、一三三

春雨に

春雨に
 けむる御嶽や櫻島
 旅の夜を
 君とくむなる
 チヨカの酒
 き、たやな
 ふるき唄
 そいならうとが
 チヨカのぬくみの
 なつかしや

そいならうとが—それなら唄いませう

一五、四、二四

鹿兒島なまり

ぢやろ ぢやろ がつついてそか ぢやろ
 おやつとさ ごわした
 お疲れさん
 お茶のお菓子はおんたんか
 おかんにじゃんぼにかるかんか
 ぢやろ ぢやろ がつついてそか ぢやろ

がつついてそかぢやろ—大変疲れたでせう
 おやつとさごわした—お疲れさんでした

一五、四、二四

木市きいち

朝の木市へ来て見れば
 木市へ掛けし掛小屋の
 朝げの湯気の立ちてけり
 夕、木市へ来て見れば
 うれ残りたる八重櫻
 花散りていたりけり

木市—植木市

一五、四、二六

【付記】

本稿をなすにあたり、船田辰子氏、船田奇岑氏に
 多大なご協力、ご教示を賜りました。末筆ながら
 ここに記し、厚くお礼申し上げます。

（ながいあきお／当館主任学芸員）